

2016年12月18日 礼拝メッセージ

聖書：イザヤ書 60 章 14～22 節

説教：主はあなたの光となる

## 1 主を待ち望むクリスマス

クリスマスがイエス・キリストのお誕生をお祝いする日であることは、ほとんどの方が知っています。ところが今日、教会に来てみると、週報には待降節の第四週目と書かれており、みなさんの前には四本のローソクが灯っています。クリスマスは聞いたことがあるが、待降節、アドベントとは何か。あまりなじみがないかもしれません。「たい」は待つこと、「こう」は降りてくること、「せつ」はシーズンを意味しています。やみに包まれている私たちのところへ、神が光となって降りてこられる。そのことを待ち望む季節。ひとことと言えばそのような意味になります。

でも、主は既に二千年前私たちのところへ降りてこられました。もう待つ必要はないではないか。それなのにどうしてわざわざ今この時に待つのか。これには少し説明が必要です。救い主であるイエス・キリストが二千年前に一度来られ、それでおしまいというのなら、確かに私たちはなにかを待つ必要はありません。ところが、聖書にはこう書かれています。「私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」

(ピリピ3章20節)

主は、この世界にあるすべての罪と悪とをさばき、苦しむ者を救うために再び来られる。その来られる日を待ち望んでいる。それがクリスチャンの立場と言っていいでしょう。でも、普段どうしても忘れがちになります。それでこのクリスマスの前の四週間、主を待ち

望む思いを確認していく。それが待降節の意味です。

## 2 やみの世

### 1) 苦しみと悩み

ところで、神である主はなぜ私たちのところへ来られたのでしょうか。そもそも私たちが住んでいるこの世とはどんな世界なのでしょう。

何も悩みがない方はおそらくいないはずです。兄弟どうし、親と子の間で憎しみ合うことがあります。夫婦の関係で悩むことがあります。重い病気だと告げられ目の前が真っ暗になることがあります。信頼していた友人に裏切られることがあります。愛する家族を病気や事故で突然失うことがあります。年齢を重ねるうちに死ぬことを考えざるを得なくなり、戸惑うことがあります。外に目を向ければ戦争で、虐待人のいのちが奪われています。

この人が死ぬということについて、私は若いときに悩みました。一生懸命がんばって働き、正しく生きたとしても、結局最期は死んでいく。だったら生きていく意味があるのかわからない。生きる意味がわからないので前に進めなくなり、学校に行けなくなりました。四年間、今で言う不登校状態になった。なんとか学校は卒業しましたが、心の深いところにあるむなしさは消えない。そのことをごまかしながら死んだも同然の生き方をしていました。

## 2) 心に偽りのことばを抱いている

なぜこの世界は苦しみと悩みに満ちてしまったのでしょうか。私は最初考えました。父親が悪い。それで父をずっと憎みました。その次に政治が悪いと考えるようになり、ことあるごとに世の中に対して怒りをぶつけていました。そうやって、自分は正しいと思いつ込んでいました。

ところが聖書にはこう書いてあるのです。

「私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。」(イザヤ 59 章 13 節)

あなたは自分がこんなに不幸になったのは、自分以外のだれかに責任があると考えて批判ばかりしているけれど、自分はどうか。あなたは神に背き、心に偽りのことばを抱いてつぶやいている。表の目に見える所では良い人を演じ、心の中でよくないことを考えている。それが人間の本当の姿だと言うのです。

## 3 罪と救い

### 1) 悔い改め

そんな人はどうなるのでしょうか。神にそむくことは、死に値するほどの重い罪であると書いてあります。そうなると私は神のさばきを受けて、真っ先に殺されなければならないこととなります。でも、今ここに立って偉そうなことを語っております。なぜでしょうか。私が努力して良い人にでもなったのでしょうか。そんなわけはありません。聖書には何と書いてあるのか。この世界のすべての問題は、私たちが神にそむいたところから始まります。ということは、解決の方向は非常に単純です。神に立ち戻ればよいことに

なる。

ここで私の経験を話しましょう。23 年前のことになりますが、ずっと夫婦関係がぎくしゃくしていて、とうとうある日妻から「あなたとは離婚します」と宣言されてしまいました。思い悩んで、次の日曜日に妻が通っていた教会に駆け込んだ。それが教会に行った最初のきっかけでした。最初は、自分で何とか解決しなければと思っていました。でもまったくできなかつた。教会に行って、聖書を開いたとき初めてなぜできないか、その理由がわかった。自分の姿がこれだったのです。妻の前で良い夫を演じようとしていながら、心の中では偽りのことばを抱く。嘘をつく。隠す。そこを直そうとしないのですから、できるわけはなかつたのです。

教会に駆け込んだとき、牧師から問われました。あなたは自分が罪人であることを認めますか。私は自分のしてきたことをふり返り、「はい認めます」と答えました。そうしたら牧師が、「それが悔い改めです」と教えてくれました。そのとき、私は神に立ち戻ったわけです。

### 2) 救い主はとりなしてください

でもそれで何が変わるのでしょうか。日本には、間違っただけは水に流して忘れるという文化がありますが、聖書の神は違います。罪は絶対に忘れません。悪いことは悪いとします。悪いことは何年経とうとも必ずさばく。そういうお方です。神に逆らったものは死罪なのです。「ごめんなさい」の一言で赦してくれるはずはない。いったいどうするのでしょうか。

具体例を挙げましょう。私がまだ小学生一年生くらいの頃ですが、夕ご飯のおかずのこ

とで好き嫌いをしてわがままを言ったことがありました。父親はそれを見て怒り、私を暗い作業小屋に連れて行きました。ここで反省していると言われ、閉じ込められました。泣きながら「ごめんなさい」と言っても父は赦してくれません。結局、祖母が迎えに来てくれて、祖母が父親と私との間に入り、とりなしてくれたので、家に帰ることができました。今なら児童虐待だとか言われそうな話かもしれませんが、私は感謝しています。そうやって、何が正しく何が悪いことなのかを教えてもらいました。

神がなさることはこれとよく似ています。自分こそ神にそむいた罪人ですと認めるならば、神はどうするか。イザヤ書 59 章 16 節にこうある。「主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義をご自分のささえとされた。」

主というのは、神のことです。神は私たちが苦しんでいるのをご覧になっている。ご覧になって驚いたとある。何に驚いたのか。「とりなす者がいない」ことに驚いた。驚いて終わりではない。罪を犯して、死ななければならぬ私たちが神は救わなければと決心された。どうやって救うのか。とりなす者がいなければなりません。私が真っ暗な作業小屋から救われたのは、祖母が父親にとりなしてくれたおかげでした。それと同じように、だれかが神と人間との間に立ってとりなす必要がある。いったいだれがとりなすのでしょうか。人間にはだれもできません。罪人が罪人のとりなしはできないからです。正しい者だけがとりなすことができます。正しい者とはだれですか。それが救い主イエス・キリストだったのです。ではいったいどうやって、と

りなすのでしょうか。

神に逆らった者は死ななければならない。この原則を曲げたのでしょうか。あるいは例外を設けたのか。いいえ。原則は絶対に曲げられません。例外もありません。となると誰かが必ず死ななければなりません。それは誰か。とりなす方が私たちの代わりに死んでくださいました。それが十字架だったのです。神である方が、人となられ、私たちの身代わりになっているのちを捨ててくださった。それで私たちは救われる。あなたはもう無罪ですと言われました。二千年前に来られたイエス・キリストがそうしてくださいました。

### 3) 主があなたの永遠の光となる

私は、周りの人たちにひどい迷惑をかけて生きていました。絶対にあなたを赦しませんと言われた事もあります。ごめんなさいと謝ってもその方の怒りはおさまりませんでした。もし神に出会っていなかったら、私はそのことで一生苦しみ続けたらと思うます。ですから、あなたの罪は赦された。神にそう言われたとき、私は肩の荷がすうっと軽くなるような思いがしました。

でも一つだけ疑問が残ります。ごめんで済むなら警察はいらないと言います。人を悲しませたこと、人を裏切ったこと、人に迷惑をかけたこと、全部取り返しができません。愛する者を失った悲しみもそうです。愛する者を取り戻すことはできません。悪い人たちは悪いことをしているではないか。自分だけが悔い改めたとしても何が変わるのか。何も変わらない。これは不公平ではないのか。そういう疑問が湧いていきます。でも神は公平な方のはずです。何もしないはずはありません。ではどうするのか。

イザヤ書 60 章 20 節。「あなたの太陽は沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。」

神を信じて、救われ、あなたの罪は赦されたと言われても、なお私たちは罪を犯し続けます。やみの世にあつて苦しみが襲つて来ます。そのたびに悲しみます。でもいつまでも嘆き悲しむのではない、必ず終わりの日が来ると約束します。そのとき、あなたを苦しめた者たちの子らは、身をかがめてあなたのところに来る、とも言われる。今不公平と見えていたとしても、必ず完全に公平にさばく。あなたが失ったものを、あなたはすべて取り戻すことができる。いのちさえも取り戻すことができる。取り戻したものは、もう二度と失われることはない。救い主イエス・キリストが再び来られる日、必ずそのようにしてくださる。それが私たちの望みです。

そのことを思い起こしながら、このクリスマスを迎えていきたいと願います。